

令和元年 12月号

◆荒井類 選

《あ〜、そうきたか》

東西南北より吹雪かな

夏目漱石

漱石先生ともあろうお方が、なんというリズムの悪い句を…最初そう思った。

「とうざいなんぼく…」と読んでいくと、全体十五音の字足らず。

そのように読んでしまった段階で、漱石先生の仕掛けた「畏」にかかってしまっていたのだね。だって「東西南北」と書いてあったら、思わず「とうざいなんぼく」と読んでしまうではないか。そこで漱石先生はニヤリとしたに違いない。

ひがしにし（5）みなみきたより（7）ふぶきかな（5）。

《冬の室内を淡々と写生した句だが》

乾鮭と並ぶや壁の棕櫚箒

漱石

乾鮭（からぎけ）とは「サケの腹を裂いて内臓を除き、塩をふらずに陰干しにしたもの。（大辞林・第三版）」。棕櫚箒（しゅろぼうき）は、「棕櫚の毛をたばねてつくった箒。（同前）」。

この「もと生物」（動物・植物）が今、命なきモノ（無生物）として、壁に並んでたてかけられている。冬の室内を淡々と写生したこの句だが、淡々とした写生句からは荒涼たる季節感が漂う。

そして私は、ここにある種の「滑稽」を感じる。命あるものがモノ化していることの、厳粛な滑稽さ。

《ボブディランの「答は風に吹かれている」に比肩》

風に聞け何（いず）れか先に散る木の葉

漱石

ノーベル賞文学賞受賞のボブディランより半世紀も前に、漱石先生の「類想」があった。

《禁欲の空間と自由奔放なる猫の恋のギャップ》

猫知らず寺に飼われて恋わたる 漱石

春の季語「猫の恋」をアレンジして表現している作品。句意は、「猫はそこが寺とは知らずに飼われ、春ともなれば自由奔放に恋をする」ということ。

色恋は煩惱のもと（あるいは煩惱のあらわれ）であり、執着そのものだから、禁欲・持戒の空間である「寺」にはそぐわない。禅寺での修行体験を持つ漱石は、寺の猫の自由奔放な恋と寺に内在する特性とのギャップに注目し、そこに滑稽を見た。

《芭蕉と漱石のかけあいのおもしろさ》

梅白し昨日（きの）ふや鶴を盗まれし 芭蕉

鶴獲たり月夜に梅を植（うえ）んかな 漱石

「中国宋の時代、林逋（りんぽ）は、隠遁して西湖（せいこ）のほとりに住んでいたが、妻をめとらず梅を植え、子のかわりに鶴を飼い、船を湖に浮かべて清らかに風雅に暮らしたという。（学研 四字熟語辞典）」この故事から「梅妻鶴子（ばいさいかくし）」という四字熟語が生まれた。それは「梅と鶴を家族にする意で、妻をめとらず、俗世を離れ、気ままに風流に暮らすたとえ。（同前）」である。

この「梅妻鶴子」を踏まえて（芭蕉さんも教養あふれまくりですね）、「白梅が見事ですけれど、鶴が見えませんか。昨日盗まれたんですか」と梅をほめた芭蕉さん。

夏目漱石は（芭蕉の掲句も踏まえてだろう。彼も教養ありまくり）、鶴を盗んだ人（？）の立場からの一句。「鶴は獲（え）た。さあ、梅を植えようか」。

《自虐ネタとはもはや言えない》

古い愉し二つに見ゆる初日の出 吉田敦子

句意は平明である。老齡のため（眼疾のためか）ものが二つに見えるのだ。それを嘆いたりすることなく、「老いるのは嬉しいなあ！ だって初日の出が二つも見られるんだよ」と笑い飛ばす余裕。人生の達人というべきか。

ただし、これは「自虐ネタ」の一句というべきではないと思う。「自虐ネタ」は、どこか「嘆き」を内蔵していると思うが、ここには「嘆き」などかけられないからだ。すばらしき俳諧精神。俳諧精神にあふれる人は「徘徊老人」にはなるまい。

この句は某全国紙の「俳壇」において、長谷川權が一席にとったものだ。十句選句した中でこの句を一席にとるとは、長谷川權もたいしたものである。

《大坂なおみの「メタ認知の進化」のように》

全豪オープンで大坂なおみが危機を乗り越って優勝してから、一部で「メタ認知」ということが言われるようになった。「メタ認知」とは、「自分で自分の心の働きを監視し、制御すること」（広辞苑 第七版）である。「メタ認知」能力の高い人は、イメージ的には、「もう一人の自分がいて、自分自身を上から客観的に観て、コントロールできる人」ということになりましょうか。

さて掲句にもどる。ものが二重に見える、と嘆いている現実がある。それをもう一人の自分が観ていて、心がマイナス方向へいかないようにし、素晴らしい滑稽句に昇華させた。つまり、「メタ認知」能力を高めれば、いい滑稽句ができるようになる？

（文中敬称略）